

Oracle® VM Server for SPARC 3.5 リリースノート

ORACLE®

Part No: E86355-01
2017 年 8 月

Part No: E86355-01

Copyright © 2007, 2017, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する場合、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したこと起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクル およびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に別段の定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc>)を参照してください。

Oracle Supportへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info>)か、聴覚に障害のあるお客様は (<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs>)を参照してください。

目次

このドキュメントの使用方法	7
1 Oracle VM Server for SPARC 3.5 リリースノート	9
このリリースの最新情報	10
システムファームウェア、Oracle Solaris OS、またはその両方に依存する機能	12
Oracle VM Server for SPARC 3.5 システム要件	12
非推奨および削除済みの Oracle VM Server for SPARC 機能	13
既知の問題	13
Oracle VM Server for SPARC ソフトウェアに影響するバグ	13
ドキュメントの問題	34
解決済みの問題	36

このドキュメントの使用方法

- **概要** - 今回のリリースの変更点とソフトウェアに影響する既知のバグなど、Oracle VM Server for SPARC 3.5 ソフトウェアに関する最新情報を提供します。
- **対象読者** - SPARC サーバー上の仮想化を管理するシステム管理者
- **必要な知識** - UNIX システムおよび Oracle Solaris オペレーティングシステム (Oracle Solaris OS) の実践的な知識を持つシステム管理者。

製品ドキュメントライブラリ

この製品および関連製品のドキュメントとリソースは <http://www.oracle.com/technetwork/documentation/vm-sparc-194287.html> で入手可能です。

フィードバック

このドキュメントに関するフィードバックを <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお聞かせください。

Oracle VM Server for SPARC 3.5 リリースノート

このリリースノートでは、Oracle Solaris OS の完全に認定されたバージョン、サポートされるプラットフォーム用のシステムファームウェア、および Oracle VM Server for SPARC 3.5 ソフトウェアを実行している場合に発生する可能性のある問題に関する情報について説明します。これらの認定バージョンを実行していない場合は、さらに多くの問題が発生する可能性があります。

注記 - Oracle VM Server for SPARC 3.5 ソフトウェアは必ず、サポートされているハードウェアプラットフォーム上で完全に認定されたシステムファームウェアバージョンとともにインストールおよび実行するようにしてください。システム上のすべてのドメインで、Oracle Solaris 11 OS の最新の Support Repository Update (SRU) を実行する必要があります。ゲストドメインで Oracle Solaris 10 1/13 OS の最新のパッチを実行することもできます。

このリリースノートには、古いバージョンのソフトウェアに存在する既知の問題がいくつか含まれている可能性があります。

サポートされているハードウェアおよび完全に認定されたソフトウェアとシステムファームウェアについては、『[Oracle VM Server for SPARC 3.5 インストールガイド](#)』の第 1 章、「システム要件」を参照してください。

注記 - Oracle VM Server for SPARC の機能は、『[Oracle VM Server for SPARC 3.5 インストールガイド](#)』の「サポートされるプラットフォーム」に一覧表示されているサポートされるハードウェアプラットフォーム上で追加および維持されています。ただし、新しい機能は追加されず、既存の機能はリストから消去されたハードウェアプラットフォームでは維持されません。

一般に、Oracle VM Server for SPARC の新機能は、Oracle VM Server for SPARC ソフトウェアがリリースされた時点で、リストに価格が記載されサポートされる Oracle のすべての SPARC T シリーズサーバー、SPARC M シリーズサーバー、および SPARC S シリーズサーバーと Fujitsu M12 サーバーおよび Fujitsu M10 サーバーで使用可能になります。ただし、すでに最終注文日が過ぎている SPARC ベースのサーバーでは使用できません。

注記 - この本で説明されている機能は、『Oracle VM Server for SPARC 3.5 インストールガイド』に記載されているすべてのサポートされるシステムソフトウェアおよびハードウェアプラットフォームで使用できます。ただし、一部の機能は、サポートされているシステムソフトウェアおよびハードウェアプラットフォームのサブセット上でしか使用できません。このような例外については、『Oracle VM Server for SPARC 3.5 リリースノート』の「このリリースの最新情報」および [What's New in Oracle VM Server for SPARC Software \(http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/vm/documentation/sparc-whatsnew-330281.html\)](http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/vm/documentation/sparc-whatsnew-330281.html) を参照してください。

このリリースの最新情報

Oracle VM Server for SPARC (Logical Domains) ソフトウェアのすべてのバージョンで導入された機能については、[What's New in Oracle VM Server for SPARC Software \(http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/vm/documentation/sparc-whatsnew-330281.html\)](http://www.oracle.com/technetwork/server-storage/vm/documentation/sparc-whatsnew-330281.html) を参照してください。

Oracle VM Server for SPARC 3.5 ソフトウェアの主な変更点は、次のとおりです。特に明記されていないかぎり、各機能はサポートされているすべてのプラットフォームで使用可能です。サポートされているプラットフォームのリストについては、『Oracle VM Server for SPARC 3.5 インストールガイド』の「サポートされるプラットフォーム」を参照してください。

- Oracle VM Server for SPARC のロギングを改善し、コマンドのロギングを追加しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「Logging Oracle VM Server for SPARC Events」を参照してください。
- ルートドメインが使用できない場合に、I/O ドメインを起動する `ldm start-domain -f` オプションを追加しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「Starting a Domain」を参照してください。
- `ldm stop-domain` コマンドの発行後、ドメインが停止するまで待機する時間を指定します。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「Stopping a Domain」を参照してください。
- XML および XMPP インタフェースに、CLI に一致する機能を追加しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 開発者ガイド』を参照してください。
- ブラックリストに登録された退避保留中のコアおよびメモリーリソースを表示します。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「Using FMA to Blacklist or Unconfigure Faulty Resources」を参照してください。
- ライブ移行全体に ADI のサポートを追加しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「Migration Restrictions for Silicon Secured Memory Servers」を参照してください。
- SR-IOV または PCIe カードが存在する場合に、ドメインの移行が有効になります。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「Migrating a Domain That Has an SR-IOV Ethernet Virtual Function Assigned」を参照してください。

- 以前メモリーレイアウトに互換性がなかったマシン間のドメインの移行の成功率が向上しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[Migration Requirements for Memory](#)」を参照してください。
- SP のリセット後に移行済みのドメインが再表示されないようにしました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[Saving Post-Migration SP Configurations Automatically](#)」を参照してください。
- ネイティブ CPU ファミリの移行をサポートしました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[Domain Migration Requirements for CPUs](#)」を参照してください。
- メモリー割り当てサイズを標準化しました。
- 名前付きリソースの移行をサポートしました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[Migrating a Domain That Uses Named Resources](#)」を参照してください。
- LUN0 のない SCSI デバイスをサポートしました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[Simulating a LUN0](#)」を参照してください。
- 仮想スイッチリレーをサポートしました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[Using a Virtual Switch Relay](#)」を参照してください。
- MAC アドレスの衝突の処理を改善しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[Detecting MAC Address Collisions](#)」を参照してください。
- 代替 MAC アドレスの動的な更新のサポート。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[Dynamically Updating Alternate MAC Addresses](#)」を参照してください。
- 最大 999 個の仮想ネットワークのサポートを追加しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[Virtual Network Device](#)」を参照してください。
- MIB を拡張しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理情報ベースユーザーズガイド』を参照してください。
- `ldm list-io` および `ldm list-netdev` コマンドへの XMPP 拡張が行われました。`ldm(1M)` マニュアルページを参照してください。
- 自動ディスク展開を提供するように、OVM テンプレートユーティリティーを更新しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 開発者ガイド』の「[Oracle VM Server for SPARC Template Features](#)」を参照してください。
- OpenStack イメージを作成するように、OVM テンプレートユーティリティーを更新しました。『Oracle VM Server for SPARC 3.5 開発者ガイド』の「[Oracle VM Server for SPARC Template Features](#)」を参照してください。
- バグの修正。

システムファームウェア、Oracle Solaris OS、またはその両方に依存する機能

一部の Oracle VM Server for SPARC 3.5 機能は、完全に認定されたシステムファームウェアおよび Oracle Solaris OS がインストールされている場合のみ使用できます。制御ドメインでは、完全に認定された Oracle Solaris OS を実行しておく必要があることに注意してください。

サポートされるハードウェア、システムファームウェア、および Oracle Solaris OS については、『[Oracle VM Server for SPARC 3.5 インストールガイド](#)』の第 1 章、「システム要件」を参照してください。Fujitsu M12 サーバーについては、最新の *Fujitsu SPARC M12* サーバープロダクトノート参照してください。Fujitsu M10 サーバーについては、最新の *Fujitsu M10/SPARC M10* サーバープロダクトノート参照してください。

一般に、一部の Oracle VM Server for SPARC 3.5 では、完全に認定されたシステムファームウェアをシステムが実行していなくても、機能を使用できます。

ゲストドメイン、I/O ドメイン、またはルートドメインが完全に認定された Oracle Solaris OS バージョンを実行していない場合、次の Oracle VM Server for SPARC 3.5 機能は使用できません。

- ADI の移行
 - 少なくとも Oracle Solaris 11.3 SRU 18 が必要です
 - 少なくとも SPARC M7 シリーズサーバーまたは SPARC T7 シリーズサーバーの任意のバージョンのシステムファームウェアが必要です
- SR-IOV Ethernet 仮想機能の移行
 - 移行対象のドメインに少なくとも Oracle Solaris 11.3 SRU 9 が必要です

Oracle VM Server for SPARC 3.5 システム要件

Oracle VM Server for SPARC 3.5 リリースで使用する推奨および最小のソフトウェアコンポーネントについては、『[Oracle VM Server for SPARC 3.5 インストールガイド](#)』の第 1 章、「システム要件」を参照してください。

非推奨および削除済みの Oracle VM Server for SPARC 機能

次の Oracle VM Server for SPARC 機能は非推奨で、このソフトウェアの将来のリリースで削除されます。

- Logical Domains Manager ベースの電源管理のサポート。

以前に非推奨になった、次の Oracle VM Server for SPARC 機能は、このソフトウェアの将来のリリースで削除されます。

- `ldm migrate-domain -p filename` コマンドを使用して対話型でない移行操作を開始することが非推奨となりました。代わりに、SSL 証明書ベースの認証を使用します。『[Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド](#)』の「[Configuring SSL Certificates for Migration](#)」を参照してください。

既知の問題

このセクションでは、Oracle VM Server for SPARC 3.5 ソフトウェアに関する一般的な問題と固有のバグについて説明します。

Oracle VM Server for SPARC ソフトウェアに影響するバグ

このセクションでは、このバージョンのソフトウェアを使用するときに発生する可能性があるバグの概要について説明します。最新のバグを最初に説明します。回避方法および回復手順がある場合は、指定しています。

Oracle VM Server for SPARC 3.5 ソフトウェアに影響するバグ

ドメインからのコアの削除の失敗後に `ldmd` がクラッシュする

バグ ID 26435797: 仮想 CPU または CPU コアの削除操作が失敗した場合に、`ldmd` デモンがコアダンプすることがあります。この障害は、ターゲットドメインのすべての CPU がバインドされているか、または負荷が大きい場合に発生する可能性があります。

この障害が発生した場合、`ldm remove-core` コマンドは、次のいずれかのエラーメッセージを発行する可能性があります。

```
Invalid response
```

```
Failed to receive version negotiation response from logical domain manager:  
Connection reset by peer
```

仮想 CPU の削除を実行するには、ターゲットドメインからいくつかの CPU をバインド解除するか、またはワークロードを小さくする必要があります。この問題は、バインドされているか、またはバインドされていないドメインでの仮想 CPU の削除操作には影響しないことに注意してください。

関連付けられたサービスドメインのリブート時に、`vsw-relay-mode` の動作が `remote` から `local` に戻る

バグ ID 26184111: 反射型リレーモードを有効にするために、仮想スイッチに `vsw-relay-mode` プロパティが設定されています。このモードは、サービスドメインのリブート後に保持されないため、状態が `local` のデフォルト値に戻ります。

回避方法: リブート後に、仮想スイッチで次のコマンドを実行して、`vsw-relay-mode` プロパティを有効にします。

```
primary# ldm set-vsw vsw-relay-mode=remote primary-vsw0
```

グローバルパフォーマンスカウンタが有効にされている場合に、CPU 間の移行が失敗することがある

バグ ID 26047815: 特定の CPU 間移行シナリオで、次のエラーで移行が失敗することがあります。

```
API group 0x20b v1.0 is not supported in the version of the firmware  
running on the target machine.  
API group 0x214 v1.0 is not supported in the version of the firmware  
running on the target machine.
```

次のすべての条件が存在する場合にこの問題が発生します。

- ドメインに `generic` または `migration-class1` に設定されている `cpu-arch` プロパティがある。
- ドメインに `global` 値を含む `perf-counter` プロパティ設定がある
- ドメインが少なくとも SPARC M7 シリーズサーバーまたは SPARC T7 シリーズサーバーでブートされた
- ターゲットマシンが SPARC M7 シリーズサーバーまたは SPARC T7 シリーズサーバーより前にリリースされたプラットフォームである

この問題は、`perf-counter` プロパティ設定に `global` 値が含まれている SPARC M7 シリーズサーバーまたは SPARC T7 シリーズサーバー以上でブートされたドメイ

ンが、古いプラットフォームに存在していないプラットフォーム固有のパフォーマンスカウンタ Hypervisor インタフェースを登録するために発生します。移行の一部として、ドメインによって使用されるすべてのインタフェースがターゲットマシンに存在していることを確認するチェックが実行されます。これらの SPARC M7 シリーズサーバーまたは SPARC T7 シリーズサーバー固有のインタフェースが検出された場合、移行が中止されます。

回避方法: `cpu-arch` が `native` でなく、SPARC M7 シリーズサーバーおよび SPARC T7 シリーズサーバー以上が移行プールに含まれている場合に、`perf-counter=global` を設定しないでください。

仮想 SCSI HBA サブシステムはすべての SCSI エンクロージャーサービスデバイスをサポートしていない

バグ ID 25865708: Oracle Solaris OS によって、セカンダリ機能として認識される SES デバイスは `vhba` でサポートできない SES デバイスタイプです。`vhba` は、INQUIRY ペイロードの `inq_dtype` フィールドに指定されているように、デバイスタイプが `0xd` の値を持つ SES デバイスをサポートできます。

ゲストドメインで `vhba` バイナリがいくつかの SCSI エンクロージャーサービス (SES) デバイスを初期化しようとする、`vhba` によって `scsi` が次の警告メッセージを発行します。

```
... scsi: WARNING: scsi_enumeration_failed: vhba2 probe@w50080e51bfd32004,0,d enumeration
failed during tran_tgt_init
```

,d 部分列は、SES デバイスの SCSI 業界標準コードの `0xd 16` 進数を表します。 ,d 文字列は、この警告メッセージがサポートされていない SES デバイスのタイプの結果であることを示します。

`vhba` は、INQUIRY ペイロードの `inq_dtype` フィールドに指定された `0xd` のデバイスタイプを持つ SES デバイスをサポートできます。

```
# mdb -k
> ::vsan
vsan_t( 6400126e08c0 ) cfg-hdl(0) iport-path(/pci@300/pci@1/pci@0/pci@4/SUNW,emlxs@0,11/
fp@0,0)
  vsan_iport_t( 6400125b8710 )
    vsan_tport_t( 64001bf89718 ) tport_phys(w216000c0ff8089d5)
      vsan_lun_t( 640011aa65d0 ) lun(0) vlun-id(1127b) []

> 640011aa65d0::print vsan_lun_t vl_sd |::print struct scsi_device sd_inq |::print struct
scsi_inquiry inq_dtype
inq_dtype = d
```

ldomHbaTable が空である

バグ ID 24393532: バグ ID 23591953 の修正は、`snmpwalk` コマンドを使用した Oracle VM Server for SPARC MIB オブジェクトの一覧表示などの Oracle VM Server for SPARC

Oracle VM Server for SPARC MIB モニタリングと、ldomHbaTable テーブルのトラブル生成の両方に無効です。その結果、Oracle VM Server for SPARC MIB ldomHbaTable テーブルの内容が表示されません。

```
primary# snmpwalk -v1 -c public localhost SUN-LDOM-MIB::ldomHbaTable
primary#
```

回避方法: ldm list-hba コマンドを使用して、HBA 情報を表示します。

成功したドメイン移行中に不正な Unable to Send Suspend Request エラーが報告される

バグ ID 23206413: まれに、成功したドメイン移行で次のエラーが報告されます。

```
Unable to send suspend request to domain domain-name
```

この問題は、ドメインの一時停止中に Logical Domains Manager がエラーを検出したときに発生しますが、Logical Domains Manager は回復し、移行を完了できます。コマンドの終了ステータスは 0 になり、移行の成功を表します。

回避方法: 移行は正常に完了しているため、エラーメッセージは無視できます。

多数の仮想デバイスを持つバインドされたドメインのコールド移行が失敗し、ドメインのバインドされたコピーが 2 つ残ることがある

バグ ID 23180427: 多数の仮想デバイスを持つバインドされたドメインをコールド移行するときに、操作が失敗し、SMF ログに次のメッセージが表示されることがあります。

```
warning: Timer expired: Failed to read feasibility response type (9) from target LDoms
Manager
```

この障害は、ソースマシン上で実行されている Logical Domains Manager がタイムアウトして、ターゲットマシンでドメインがバインドされるまで待機していることを示します。移行しているドメイン内の仮想デバイスの数が増えると、この問題の発生率が上がります。

この障害のタイミングにより、ソースマシンとターゲットマシンの両方でドメインのバインドされたコピーが発生します。このドメインの両方のコピーを起動しないでください。この操作により、両方のドメインが同じ仮想ディスクバックエンドを参照するため、データの破損が発生する場合があります。

回復方法: ターゲットマシンで移行されたドメインのコピーが適切であることを確認したら、ソースマシンでドメインのコピーを手動でバインド解除し、破棄します。

ターゲットマシンの空き LDC が不十分な場合、移行が失敗する

バグ ID 23031413: ドメインの移行中にターゲットマシンの制御ドメインで LDC が不足すると、説明なしで移行が失敗し、次のメッセージが SMF ログに書き込まれます。

```
warning: Failed to read feasibility response type (5) from target LDOMs Manager
```

このエラーは、ターゲットマシンで移行しているドメインのバインドに失敗したときに発行されます。同様に、ターゲットマシン上でほかの理由でバインド操作が失敗することがあります。

回避方法: 移行を成功させるには、移行されるドメインまたはターゲットマシンの制御ドメインで、LDC の数を減らす必要があります。ドメインによって処理または提供されている仮想デバイスの数を減らすことによって、LDC の数を減らすことができます。LDC の管理の詳細については、『[Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド](#)』の「[Using Logical Domain Channels](#)」を参照してください。

ovmtlibrary でディスクイメージファイル名が 50 文字に制限される

バグ ID 23024583: ovmtlibrary コマンドは、ディスクイメージファイル名を 50 文字に制限します。ovmtlibrary は、.ovf ファイルをチェックし、<ovf:References> セクションの情報と圧縮解除されたディスクの実際のファイル名とを比較します。

ファイルが異なる場合、またはディスクイメージのファイル名が 50 文字より長い場合は、エラーが発行されます。例:

```
# ovmtlibrary -c store -d "example" -q -o file:/template.ova -l /export/user1/ovmtlibrary_example
event id is 3
ERROR: The actual disk image file name(s) or the actual number of disk
image(s) is different from OVF file: template.ovf
exit code: 1
```

次の XML 例は、50 文字を超えるディスクイメージファイル名を示しています。

```
<ovf:References>
<ovf:File ovf:compression="gzip"
ovf:href="disk_image.ldoms3.5_build_s11_u3_sru15_01_kz_42G.img.gz"
ovf:id="ldoms3" ovf:size="6687633773"/>
</ovf:References>
```

回避方法: ディスクイメージファイル名の長さを 50 文字より短くします。

非アクティブなゲストドメインに追加された仮想ネットワークデバイスがデフォルトの linkprop 値を取得しない

バグ ID 22842188: linkprop=phys-state を仮想ネットワークデバイスでサポートするには、Logical Domains Manager は、仮想ネットワークデバイスが接続されている仮想スイッチに仮想スイッチを補助する物理 NIC があるか検証する必要があります。

仮想スイッチを問い合わせできるように、Oracle VM Server for SPARC netsvc エージェントはゲストドメイン上で実行されている必要があります。

ゲストドメインがアクティブではなく、仮想ネットワークデバイスの仮想スイッチを持つドメイン内のエージェントと通信できない場合は、仮想ネットワークデバイスで linkprop=phys-state が設定されていません。

回避方法: ドメインがアクティブなときに linkprop=phys-state のみを設定します。

linkprop=phys-state のときに ldm set-vsw net-dev= が失敗する

バグ ID 22828100: 仮想スイッチが linkprop=phys-state である仮想ネットワークデバイスを接続した場合、接続されている仮想スイッチは、net-dev プロパティによって指定されている有効な補助 NIC デバイスを持つ必要があります。net-dev プロパティ値は、有効なネットワークデバイスの名前である必要があります。

net-dev= を使用してこのアクションが実行される場合、net-dev プロパティ値が有効な NIC デバイスではない場合でも、仮想スイッチは引き続き linkprop=phys-state を示します。

回避方法: まず、仮想スイッチに接続されているすべての仮想ネットワークデバイスを削除してから、仮想スイッチを削除します。次に、有効な net-dev 補助デバイスで仮想スイッチを再作成してから、すべての仮想ネットワークデバイスを再作成します。

ソケット制約を持つドメインを XML ファイルから再作成できない

バグ ID 21616429: Oracle VM Server for SPARC 3.3 ソフトウェアでは、Fujitsu M12 サーバーおよび Fujitsu M10 サーバーのみに対するソケットのサポートが導入されました。

Oracle SPARC サーバーおよび Oracle VM Server for SPARC 3.3 より前のバージョンで実行されているソフトウェアは、ソケット制約のあるドメインを XML ファイルから再作成できません。

古いバージョンの Oracle VM Server for SPARC ソフトウェアまたは Oracle SPARC サーバーでソケット制約のあるドメインを XML ファイルから再作成しようとする、次のメッセージが表示されて失敗します。

```
primary# ldm add-domain -i ovm3.3_socket_ovm11.xml
socket not a known resource
```

Oracle VM Server for SPARC 3.2 が Fujitsu M12 サーバーまたは Fujitsu M10 サーバー上で実行されているときに、ソケット制約のあるドメインを XML ファイルから再作成しようとする、次のようなさまざまなエラーメッセージが表示されてコマンドが失敗します。

```
primary# ldm add-domain -i ovm3.3_socket_ovm11.xml
Unknown property: vcpus
```

```
primary# ldm add-domain -i ovm3.3_socket_ovm11.xml
perf-counters property not supported, platform does not have
performance register access capability, ignoring constraint setting.
```

回避方法: XML ファイルを編集して、socket リソースタイプを参照しているセクションをすべて削除します。

カーネルゾーンによってゲストドメインのライブ移行がブロックされる

バグ ID 21289174: SPARC サーバーで、Oracle VM Server for SPARC ドメイン内で実行中のカーネルゾーンによってゲストドメインのライブ移行がブロックされます。次のエラーメッセージが表示されます。

```
Guest suspension failed because Kernel Zones are active.
Stop Kernel Zones and retry.
```

回避方法: 次のいずれかを選択してください。

- カーネルゾーンの実行を停止します。

```
# zoneadm -z zonename shutdown
```

- カーネルゾーンを中断します。

```
# zoneadm -z zonename suspend
```

- ゲストドメインを移行する前に、カーネルゾーンの別のシステムへのライブ移行を実行します。

『[Creating and Using Oracle Solaris Kernel Zones](#)』の第3章、「[Migrating an Oracle Solaris Kernel Zone](#)」を参照してください。

factory-default に戻したあとで、システムが以前のアクティブな構成でブートしたデバイスとは異なるデバイスからブートすると、回復が失敗する

バグ ID 20425271: `factory-default` に戻したあとで復旧をトリガーしているときに、システムが以前のアクティブな構成でブートしたデバイスとは異なるデバイスからブートすると、復旧モードが失敗します。この障害は、アクティブな構成が `factory-default` ブートデバイス以外のブートデバイスを使用する場合に発生することがあります。

注記 - この問題は、UltraSPARC T2、UltraSPARC T2 Plus、SPARC T3、および SPARC T4 シリーズサーバーで発生します。また、この問題はバージョン 9.5.3 より前のシステムファームウェアが実行されている SPARC T5、SPARC M5、および SPARC M6 シリーズサーバーにも該当します。

回避方法: 新しい構成を SP に保存するときに、次の手順を実行します。

1. `primary` ドメインのブートデバイスへのフル PCI パスを特定します。
手順 4 の `ldm set-var` コマンドでこのパスを使用します。
2. 現在設定されている `boot-device` プロパティを `primary` ドメインから削除します。
この手順は、`boot-device` プロパティに値が設定されている場合のみ実行する必要があります。プロパティに値が設定されていない場合は、`boot-device` プロパティを削除しようとする `boot-device not found` というメッセージが表示されます。

```
primary# ldm rm-var boot-device primary
```

3. 現在の構成を SP に保存します。

```
primary# ldm add-spconfig config-name
```

4. `primary` ドメインに `boot-device` プロパティを明示的に設定します。

```
primary# ldm set-var boot-device=value primary
```

説明されているとおりに構成を SP に保存したあとで `boot-device` プロパティを設定した場合は、復旧モードがトリガーされたときに、指定したブートデバイスがブートされます。

回復方法: 説明されているとおりに復旧モードがすでに失敗している場合は、次の手順を実行します。

1. ブートデバイスを、最後に実行する構成で使用されるデバイスに明示的に設定します。

```
primary# ldm set-var boot-device=value primary
```

2. `primary` ドメインをリブートします。

```
primary# reboot
```

リブートにより復旧を続行できます。

ldm add-spconfig 操作が完了していない場合にゲストドメイン eeprom のアップデートが失われる

バグ ID 19932842: 次のコマンドのいずれかが完了する前に eeprom または OBP コマンドを使用した場合、ゲストドメインから OBP 変数を設定しようとする失敗することがあります。

- ldm add-spconfig
- ldm remove-spconfig
- ldm set-spconfig
- ldm bind

この問題は、これらのコマンドの完了に 15 秒を超える時間がかかる場合に発生する可能性があります。

```
# /usr/sbin/eeprom boot-file\=-k
promif_ldom_setprop: promif_ldom_setprop: ds response timeout
eeprom: OPROMSETOPT: Invalid argument
boot-file: invalid property
```

回復方法: ldm 操作の完了後に eeprom または OBP コマンドを再試行してください。

回避方法: 影響を受けるゲストドメインで eeprom または OBP コマンドを再試行してください。この問題は primary ドメインで ldm set-var コマンドを使用することで回避できる場合があります。

仮想ネットワークデバイスが 1000 を超えるゲストドメインをリポートするとパニックを起こす

バグ ID 19449221: 1 つのドメインは 999 未満の仮想ネットワークデバイス (vnet) で構成できます。

回避方法: ドメイン上の vnet の数を 999 に制限してください。

ルートドメインのファイバチャネル仮想機能のデバイスパスが正しくない

バグ ID 18001028: ルートドメインで、ファイバチャネル仮想機能の Oracle Solaris デバイスパスが正しくありません。

たとえば、パス名が `pci@380/pci@1/pci@0/pci@6/SUNW,emlxs@0,2` であるべきところを、間違っ `pci@380/pci@1/pci@0/pci@6/fibre-channel@0,2` になっています。

`ldm list-io -l` 出力には、ファイバチャネル仮想機能の正しいデバイスパスが表示されます。

回避方法: ありません。

Oracle Solaris 11.3 SRU 12: SPARC プラットフォーム上のファイバチャネルデバイスに対して `ssd` および `sd` ドライバ機能がマージされている

バグ ID 17036795: Oracle Solaris 11.3 SRU 12 OS で、SPARC プラットフォーム上のファイバチャネルデバイスに対して `ssd` および `sd` ドライバ機能がマージされています。

この変更は物理デバイスパスのデバイスノード名に影響を与えます。デバイスノード名が `ssd@` から `disk@` に変更されます。また、この変更は `ssd` から `sd` へのデバイスドライバのバインディングにも影響を与えます。

注記 - これらのデバイスノード名またはデバイスドライババインディングに依存する Oracle Solaris OS システムのアプリケーションまたはクライアントが調整されていることを確認してください。

この変更は、Oracle Solaris 11.3 システムではデフォルトで有効にされていません。

仮想 HBA およびファイバチャネルデバイスを使用するドメインのライブ移行を実行するには、この変更を有効にする必要があります。

この変更を有効にする前に、`stmsboot -D fp -e` コマンドを実行して、MPxIO がすでに有効になっていることを確認します。

MPxIO が有効になっているかどうかを判断するには、`format` コマンドを実行します。有効になっている場合は、デバイス名に `vhci` と表示されます。または、`mpathadm -list lu` の出力が空の場合、MPxIO デバイスが列挙されません。

`beadm` コマンドを使用して、新しいブート環境 (BE) を作成します。BE を使用すると、予期しない問題が発生した場合に、以前のブート環境に簡単にロールバックできます。

BE をマウントし、`/etc/devices/inception_points` ファイルを `/etc/devices/inception_points.vhba` ファイルに置き換えます。`.vhba` ファイルには、この変更を有効にするいくつかの機能フラグが含まれています。

最後に、新しい BE をアクティブにしたあとでリブートします。

```
# beadm create BE-name
# beadm mount BE-name /mnt
# cp /mnt/etc/devices/inception_points.vhba /mnt/etc/devices/inception_points
# beadm umount BE-name
# beadm activate BE-name
# reboot
```

リブート後に、`prtconf -D | grep driver | grep sd` コマンドを使用して、変更を確認します。

いずれかのディスクで、`ssd` ドライバが使われている場合は、構成に問題があります。

仮想 HBA およびファイバチャネル仮想機能の両方が同じ LUN を参照するように構成されている場合、`mpathadm list lu` コマンドを使用して、同じディスクへの複数のパスを表示することもできます。

InfiniBand SR-IOV 削除操作で誤解を招くようなメッセージが表示される

バグ ID 16979993: InfiniBand デバイスで動的 SR-IOV 削除操作を使用しようとすると、紛らわしい不適切なエラーメッセージが表示されます。

動的 SR-IOV 削除操作は、InfiniBand デバイスではサポートされていません。

回避方法: 次のいずれかの手順を実行して、InfiniBand 仮想機能を削除します。

- 『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[How to Remove an InfiniBand Virtual Function From an I/O Domain](#)」
- 『Oracle VM Server for SPARC 3.5 管理ガイド』の「[How to Remove an InfiniBand Virtual Function From a Root Domain](#)」

SPARC T5、SPARC M5、または SPARC M6 サーバーから UltraSPARC T2 または SPARC T3 サーバーへの CPU 間の移行を実行中は、`ldm migrate -n` が失敗する

バグ ID 16864417: SPARC T5、SPARC M5、または SPARC M6 サーバーと UltraSPARC T2 または SPARC T3 サーバー間の移行の試行中は、`ldm migrate -n` コマンドは障害を報告しません。

回避方法: ありません。

ルートドメインがリブートされたあと、回復性 I/O ドメインが PCI デバイス構成の変更をサポートするべきである

バグ ID 16691046: 仮想機能がルートドメインから割り当てられた場合、次のホットプラグの状況では、I/O ドメインが回復性の提供に失敗することがあります。

- ルートドメインにルートコンプレックス (PCIe バス) を動的に追加したあと、仮想機能を作成し、それを I/O ドメインに割り当てます。
- ルートコンプレックスを所有するルートドメインに SR-IOV カードをホット追加したあと、仮想機能を作成し、それを I/O ドメインに割り当てます。
- いずれかの PCIe カードを (ホットプラグを使用して、またはルートドメインのダウン中に) 交換するか、またはルートドメインによって所有されているルートコンプレックス上の空きスロットに追加します。このルートドメインは、仮想機能をルートコンプレックスから I/O ドメインに提供します。

回避方法: 次のいずれかの手順を実行します。

- ルートコンプレックスが仮想機能を I/O ドメインにすでに提供しているときに、そのルートコンプレックス上のいずれかの PCIe カードを (ホットプラグを使用して、またはルートドメインのダウン中に) 追加、取り外し、または交換する場合は、ルートドメインと I/O ドメインの両方をリブートする必要があります。
- ルートコンプレックスが仮想機能をまだ I/O ドメインに割り当てていないときに、SR-IOV カードまたはほかのいずれかの PCIe カードをルートコンプレックスに追加する場合は、PCIe カードを追加するためにルートドメインを停止する必要があります。ルートドメインがリブートしたら、仮想機能をそのルートコンプレックスから I/O ドメインに割り当てることができます。
- 新しい PCIe バスをルートドメインに追加したあと、仮想機能を作成してそのバスから I/O ドメインに割り当てる場合は、次のいずれかの手順を実行してから、ルートドメインをリブートします。
 - 遅延再構成中にバスを追加する
 - バスを動的に追加する

primary ドメインのリブート後にゲストドメインが移行状態になる

バグ ID 16659506: primary ドメインのリブート後にゲストドメインが移行状態 (t) になります。この問題は、システム上に多数の仮想機能が構成されている場合に発生します。

回避方法: この問題を回避するには、OBP のディスクブートコマンドを数回再試行して、ネットワークからブートしないようにします。

各ドメインで次の手順を実行します。

1. ドメインのコンソールにアクセスします。

```
primary# telnet localhost 5000
```

2. `boot-device` プロパティを設定します。

```
ok> setenv boot-device disk disk disk disk disk disk disk disk disk net
```

`boot-device` プロパティの値として指定する `disk` エントリの数は、システム上に構成されている仮想機能の数によって異なります。小規模なシステムでは、プロパティ値に含める `disk` インスタンスを少なくできる可能性があります。

3. `printenv` を使用して `boot-device` プロパティが正しく設定されていることを確認します。

```
ok> printenv
```

4. `primary` ドメインのコンソールに戻ります。
5. システム上のドメインごとに、手順 1-4 を繰り返します。
6. `primary` ドメインをリブートします。

```
primary# shutdown -i6 -g0 -y
```

「**WARNING: ddi_intr_alloc: cannot fit into interrupt pool**」が、I/O デバイスドライバの接続中に、供給された割り込み数が使い果たされたことを示している

バグ ID 16284767: Oracle Solaris コンソール上のこの警告は、I/O デバイスドライバの接続中に、供給された割り込み数が使い果たされたことを示しています。

```
WARNING: ddi_intr_alloc: cannot fit into interrupt pool
```

この制限は、SPARC M7 シリーズサーバーおよび SPARC T7 シリーズサーバーより前のサポートされる SPARC システムのみに適用されます。

ハードウェアが提供する割り込み数には限りがあるため、Oracle Solaris では各デバイスで使用できる数を制限しています。デフォルトの制限は一般的なシステム構成のニーズに合うように考案されていますが、特定のシステム構成ではこの制限に調整が必要になることがあります。

特に、システムが複数の論理ドメインにパーティション化されている場合や、任意のゲストドメインに割り当てられる I/O デバイスの数が多すぎる場合は、この制限に調整が必要になることがあります。Oracle VM Server for SPARC では、全割り込み数を小

さいセットに分けて、ゲストドメインに提供します。1つのゲストドメインに割り当てられる I/O デバイスの数があまりにも多い場合は、その供給量が少なすぎて、各デバイスにデフォルトの割り込み制限を提供できないことがあります。そのため、すべてのドライバを完全に接続する前にその供給量を使い果たされてしまいます。

ドライバの中には、その割り込み数を Oracle Solaris で自動的に調整できるようにするオプションのコールバックルーチンを提供するものもあります。このようなドライバにはデフォルトの制限が適用されません。

回避方法: `::irmpools` および `::irmreqs` MDB マクロを使用して、使用される割り込みを調べます。`::irmpools` マクロは、プールに分けられた割り込みの総供給量を表示します。`::irmreqs` マクロは、各プールにマップされているデバイスを表示します。デバイスごとに、`::irmreqs` は、オプションのコールバックルーチンによってデフォルトの制限が強制されるかどうか、各ドライバがリクエストした割り込みの数、および各ドライバに提供される割り込みの数を表示します。

これらのマクロでは、接続に失敗したドライバに関する情報は表示されません。ただし、表示される情報は、デフォルトの制限をどの程度まで調整できるかを予測するのに役立ちます。コールバックルーチンを提供せずに複数の割り込みを使用するデバイスは、デフォルトの制限を調整して、使用する割り込み数を少なくせざるをえない場合があります。そのようなデバイスで使用される量を下回ってデフォルトの制限を減らすと、ほかのデバイスで使用できるように割り込みが解放されます。

デフォルトの制限を調整するには、`/etc/system` ファイル内の `ddi_msix_alloc_limit` プロパティを 1-8 の値に設定します。次に、その変更が反映されるようにシステムをリブートします。

パフォーマンスを最大にするには、開始時に大きな値を割り当て、システムが警告なしで正常にブートするまで、それらの値を少しずつ減らします。`::irmpools` および `::irmreqs` マクロを使用して、接続されているすべてのドライバに対する調整の影響を評価します。

たとえば、ゲストドメインで Oracle Solaris OS のブート中に次の警告が出されるとします。

```
WARNING: emlxs3: interrupt pool too full.
WARNING: ddi_intr_alloc: cannot fit into interrupt pool
```

`::irmpools` および `::irmreqs` マクロは次の情報を表示します。

```
# echo "::irmpools" | mdb -k
ADDR          OWNER    TYPE    SIZE  REQUESTED  RESERVED
00000400016be970 px#0     MSI-X   36    36          36

# echo "00000400016be970::irmreqs" | mdb -k
ADDR          OWNER    TYPE    CALLBACK  NINTRS  NREQ  NAVAIL
00001000143acaa8 emlxs#0  MSI-X   No         32      8     8
00001000170199f8 emlxs#1  MSI-X   No         32      8     8
000010001400ca28 emlxs#2  MSI-X   No         32      8     8
0000100016151328 igb#3    MSI-X   No         10      3     3
0000100019549d30 igb#2    MSI-X   No         10      3     3
0000040000e0f878 igb#1    MSI-X   No         10      3     3
```

```
000010001955a5c8 igb#0 MSI-X No 10 3 3
```

この例に示されるデフォルトの制限は 1 デバイスにつき 8 回の割り込みですが、これはシステムへの最後の `emlxs3` デバイスの接続を受け入れるのに十分な割り込み数ではありません。`emlxs` のすべてのインスタンスが同じように動作すると考えれば、`emlxs3` はおそらく 8 回の割り込みをリクエストしています。

36 回の割り込みの総プールサイズから、すべての `igb` デバイスで使用された 12 回の割り込みを引くことにより、24 回の割り込みを `emlxs` デバイスに使用できます。24 回の割り込みを 4 で割ると、1 デバイスにつき 6 回の割り込みによって、すべての `emlxs` デバイスが同じパフォーマンスで接続できるようになります。そのため、次の調整が `/etc/system` ファイルに追加されます。

```
set ddi_msix_alloc_limit = 6
```

システムが警告なしで正常にブートすると、`::irm pools` および `::irm reqs` マクロは次の更新された情報を表示します。

```
# echo "::irm pools" | mdb -k
ADDR          OWNER    TYPE    SIZE  REQUESTED  RESERVED
00000400018ca868 px#0     MSI/X   36    36          36

# echo "00000400018ca868::irm reqs" | mdb -k
ADDR          OWNER    TYPE    CALLBACK  NINTRS  NREQ  NAVAIL
0000100016143218 emlxs#0  MSI-X   No        32      8     6
0000100014269920 emlxs#1  MSI-X   No        32      8     6
000010001540be30 emlxs#2  MSI-X   No        32      8     6
00001000140cbe10 emlxs#3  MSI-X   No        32      8     6
00001000141210c0 igb#3    MSI-X   No        10      3     3
0000100017549d38 igb#2    MSI-X   No        10      3     3
0000040001ceac40 igb#1    MSI-X   No        10      3     3
000010001acc3480 igb#0    MSI-X   No        10      3     3
```

SPARC T5-8 サーバー: 稼働時間データに、一部の `ldm list` コマンドの値が 0 と表示される

バグ ID 16068376: 約 128 個のドメインを含む SPARC T5-8 サーバーで、`ldm list` などの一部の `ldm` コマンドに、すべてのドメインの稼働時間として 0 秒が表示されることがあります。

回避方法: ドメインにログインし、`uptime` コマンドを使用してドメインの稼働時間を調べます。

制御ドメインでの `ldm list -o status` が不正な移行の進行状況を報告する

バグ ID 15819714: `ldm list -o status` コマンドを制御ドメイン上の移行のステータスの監視に使用しているときに、不正確な完了率を報告することがまれにあります。

この問題は、移行中のドメインや、ソースまたはターゲット制御ドメイン上の `ldmd` デーモンには影響を及ぼしません。

回避方法: 移行に関連するその他の制御ドメインで `ldm list -o status` コマンドを実行して、進行状況を監視します。

ldm init-system コマンドで、物理的な I/O 変更が行われたドメイン構成が正しく復元されないことがある

バグ ID 15783031: `ldm init-system` コマンドを使用して、直接 I/O または SR-IOV 操作を使用したドメイン構成を復元すると、問題が発生することがあります。

問題が発生するのは、復元される構成で次の操作が 1 つ以上実行された場合です。

- `primary` ドメインによってまだ所有されているバスからスロットが取り外されました。
- `primary` ドメインによって所有されている物理機能から仮想機能が作成されました。
- 仮想機能が `primary` ドメインまたはほかのゲストドメイン、あるいはその両方に割り当てられました。
- ルートコンプレックスが `primary` ドメインから削除され、ゲストドメインに割り当てられました。そのルートコンプレックスは、このあとの I/O 仮想化操作の基礎として使用されます。

つまり、`primary` 以外のルートドメインを作成し、以前の操作をすべて実行しました。

前述のいずれかのアクションを実行した場合は、[Oracle VM Server for SPARC PCIe 直接 I/O および SR-IOV 機能に関するドキュメント \(ドキュメント ID 1325454.1\)](https://support.oracle.com/epmos/faces/SearchDocDisplay?amp;_adf.ctrl-state=10c69raljg_77&_afLoop=506200315473090) (https://support.oracle.com/epmos/faces/SearchDocDisplay?amp;_adf.ctrl-state=10c69raljg_77&_afLoop=506200315473090) に示す回避方法を実行します。

SPARC T4 サーバーへの移行時、`cputrack` コマンドの実行中にゲストドメインでパニックが発生する

バグ ID 15776123: ゲストドメインを SPARC T4 サーバーに移行中にそのドメインで `cputrack` コマンドが実行されている場合、移行が完了したあと、ターゲットマシン上のゲストドメインでパニックが発生することがあります。

回避方法: SPARC T4 サーバーへのゲストドメインの移行中に `cputrack` コマンドを実行しないでください。

ドメインに割り当てることができる仮想機能の最大数の制限

バグ ID 15775637: I/O ドメインには、ルートコンプレックスあたりに使用できる割り込みリソースの数に関する制限があります。

SPARC T3 および SPARC T4 サーバーでは、この制限は約 63 MSI/X ベクトルです。各 `igb` 仮想機能は、3 つの割り込みを使用します。 `ixgbe` 仮想機能は、2 つの割り込みを使用します。

あるドメインに多数の仮想機能を割り当てると、そのドメインの、これらのデバイスをサポートするためのシステムリソースが不足します。次のようなメッセージが表示されることがあります。

```
WARNING: ixgbev32: interrupt pool too full.  
WARNING: ddi_intr_alloc: cannot fit into interrupt pool
```

ゲストドメインのコンソールのバインド中に、そのコンソールへの接続が試みられると、入力がブロックされることがある

バグ ID 15771384: ドメインのゲストコンソールが、そのバインド前やバインド中にそのコンソールへの接続が繰り返し試みられた場合に休止することがあります。たとえば、ドメインがそのマシン上に移行されているときに、自動スクリプトを使用してそのコンソールをグラブする場合にこれが発生する可能性があります。

回避方法: コンソールの休止を解除するには、ドメインのコンソール端末集配信装置をホストするドメイン (通常は制御ドメイン) で次のコマンドを実行します。

```
primary# svcadm disable vntsd  
primary# svcadm enable vntsd
```

PCIe から PCI へのブリッジを備えた PCIe カードの `ldm remove-io` は、拒否されるべきである

バグ ID 15761509: このサポートドキュメント (<https://support.oracle.com/CSP/main/article?cmd=show&type=NOT&doctype=REFERENCE&id=1325454.1>) に記載された、直接 I/O (DIO) 機能をサポートする PCIe カードのみを使用してください。

注記 - 直接 I/O 機能は、SPARC M7 シリーズサーバーおよび SPARC T7 シリーズサーバー以降、非推奨です。

回避方法: `ldm add-io` コマンドを使用して `primary` ドメインにカードをふたたび追加します。

ターゲットマシン上の非アクティブなマスタードメインに依存するドメインのライブ移行を行うと `ldmd` で障害が発生し、セグメント例外が生成される

バグ ID 15701865: ターゲットマシン上の非アクティブなドメインに依存するドメインのライブ移行を試みると、`ldmd` デーモンで障害が発生してセグメント例外が生成され、クラッシュします。`ldmd` デーモンが自動的に再起動されますが、移行は中止されます。

回避方法: ライブ移行を試みる前に、次のいずれかのアクションを実行してください。

- 移行するドメインからゲスト依存関係を削除します。
- ターゲットマシン上のマスタードメインを起動します。

DRM および `ldm list` 出力に、ゲストドメイン内の実際の仮想 CPU の数とは異なる数が表示される

バグ ID 15701853: CPU の数が大幅に削減されたあとにロードされたドメインの DRM ポリシーの期限が切れると、Oracle VM Server for SPARC ログに `No response` メッセージが表示されることがあります。`ldm list` 出力には、`psrinfo` 出力に示されている数よりも多くの CPU リソースがドメインに割り当てられていることが示されています。

回避方法: `ldm set-vcpu` コマンドを使用して、ドメイン上の CPU の数を `psrinfo` 出力に示されている数にリセットします。

移行処理を「反対方向」に同時に実行すると、`ldm` がハングアップすることがある

バグ ID 15696986: 2つの `ldm migrate` コマンドを2つの同じシステム間で「反対方向」に同時にすると、その2つのコマンドがハングアップして完了できなくなることがあります。反対方向の状況は、マシン A からマシン B への移行と、マシン B からマシン A への移行を同時に開始した場合に発生します。

ハングアップは、移行プロセスが `-n` を使用して予行演習として開始された場合でも発生します。この問題が発生した場合は、ほかの `ldm` コマンドもすべてハングアップする可能性があります。

回復方法: ソースマシンとターゲットマシンの両方で Logical Domains Manager を再起動します。

```
primary# svcadm restart ldmd
```

回避方法: ありません。

SPARC T3-1 サーバー: 複数の直接 I/O パス経由でアクセス可能なディスクの問題

バグ ID 15668368: SPARC T3-1 サーバーには、デュアルポートディスクをインストールできます。このディスクには、2つの異なる直接 I/O デバイスからアクセスできます。この2つの直接 I/O デバイスをそれぞれ異なるドメインに割り当てると、ディスクが両方のドメインで使用されることになり、ディスクの実際の使用状態によっては他方のドメインに影響を及ぼすことがあります。

回避方法: 同じディスクセットにアクセスする複数の直接 I/O デバイスを、それぞれ異なる I/O ドメインに割り当てないでください。SPARC T3-1 サーバーにデュアルポートディスクがあるかどうかを調べるには、次のコマンドを SP で実行します。

```
-> show /SYS/SASBP
```

出力の `fru_description` の値が次のとおりならば、対応するシステムにデュアルポートディスクがあります。

```
fru_description = BD,SAS2,16DSK,LOUISE
```

システムにデュアルディスクが存在している場合は、次に示す直接 I/O デバイスが両方とも同じドメインに割り当てられていることを確認します。

```
pci@400/pci@1/pci@0/pci@4 /SYS/MB/SASHBA0  
pci@400/pci@2/pci@0/pci@4 /SYS/MB/SASHBA1
```

マスター - スレーブ関係にあるドメインで `ldm stop -a` コマンドを実行すると、スレーブに `stopping` フラグが設定されたままになる

バグ ID 15664666: リセット依存関係が作成されているときに、`ldm stop -a` コマンドを実行すると、リセット依存関係にあるドメインが単に停止するのではなく、再起動されることがあります。

回避方法: まず、`ldm stop` コマンドをマスタードメインに発行します。次に、`ldm stop` コマンドをスレーブドメインに発行します。スレーブドメインの初回の停止に失敗した場合は、`ldm stop -f` コマンドをスレーブドメインに対して実行します。

ドメインからすべての暗号化装置を動的に削除すると、SSH が終了する

バグ ID 15600969: 動作中のドメインからすべてのハードウェア暗号化装置を動的に削除すると、暗号化フレームワークがソフトウェア暗号化プロバイダへのシームレスな切り替えに失敗し、すべての `ssh` 接続が強制終了します。

この問題は、UltraSPARC T2、UltraSPARC T2 Plus、および SPARC T3 サーバーのみに該当します。

回復方法: ドメインからすべての暗号化装置を削除したあと、`ssh` 接続を再確立します。

回避方法: サーバー側の `/etc/ssh/sshd_config` ファイルに `UseOpenSSLEngine=no` を設定し、`svcadm restart ssh` コマンドを実行します。

`ssh` 接続にはハードウェア暗号化装置が使用されなくなるので、パフォーマンスの向上というメリットはなくなりますが、暗号化装置が削除されても `ssh` 接続は切断されません。

マシンがネットワーク接続されていない場合に NIS クライアントが実行されていると、Logical Domains Manager が起動しない

バグ ID 15518409: マシンにネットワークが構成されていない場合にネットワーク情報サービス (Network Information Service、NIS) クライアントが実行されていると、Logical Domains Manager が起動しません。

回避方法: ネットワークに接続されていないマシン上の NIS クライアントを無効にします。

```
# svcadm disable nis/client
```

vntsd を再起動しないかぎり、移行したドメインのコンソールに接続できない

バグ ID 15513998: ドメインの移行後、そのドメインのコンソールに接続できない場合があります。

移行されたドメインが Oracle Solaris 11.3 より古い OS バージョンを実行しているときに、この問題が発生します。

回避方法: コンソールに接続できるようにするには、vntsd SMF サービスを再起動します。

```
# svcadm restart vntsd
```

注記 - このコマンドは、アクティブなすべてのコンソール接続を切断します。

共通コンソールグループ内で複数ドメインを同時にネットインストールすると失敗する

バグ ID 15453968: 共通のコンソールグループを持つシステムで、複数のゲストドメインのネットインストールを同時に実行すると失敗します。

回避方法: それぞれ固有のコンソールグループを持つゲストドメインでのみネットインストールを実行してください。この障害は、ネットインストールを行う複数のドメイン間で共有される、共通のコンソールグループを使用するドメインでのみ発生します。

ldm stop-domain コマンドの動作がわかりにくいことがある

バグ ID 15368170: ldm stop-domain コマンドの動作がわかりにくい場合があります。

```
# ldm stop-domain -f domain-name
```

ドメインにカーネルモジュールデバッグ **kmdb(1)** のプロンプトが表示されている場合、ldm stop-domain コマンドが失敗し、次のエラーメッセージが表示されます。

```
LDom <domain-name> stop notification failed
```

ドキュメントの問題

このセクションでは、発見が遅れたために Oracle VM Server for SPARC 3.5 リリースでは解決できなかったドキュメントの問題やエラーを示します。

注記 - 次のドキュメントの正誤表で説明されている変更は、OTN 上の『[Oracle VM Server for SPARC 3.5 ????????????](#)』の英語版に加えられています。

これらの変更は、Oracle VM Server for SPARC 3.5 ソフトウェア製品に付属のマニュアルページまたは OTN 上の『[Oracle VM Server for SPARC 3.5 ????????????](#)』の日本語バージョンには反映されません。

ldmd(1M): ldmd/migration_adi_legacy_compat SMF プロパティの説明がない

[ldmd\(1M\)](#) のマニュアルページで `ldmd/migration_adi_legacy_compat` SMF プロパティの次の説明が欠落しています。

`ldmd/migration_adi_legacy_compat`

いずれかのマシンで、Oracle VM Server for SPARC 3.5 で導入された Application Data Integrity (ADI) バージョン情報の移行をサポートしていない場合でも、シリコンセキュアメモリー (SSM) をサポートするサーバー間でドメイン移行を許可するかどうかを指定します。

ソースマシンとターゲットマシンの両方で、Oracle VM Server for SPARC ソフトウェアの最新のバージョンが実行されている場合は、この SMF プロパティを使用する必要はありません。



注意 - SSM をサポートしているサーバーでドメインの移行を実行しようとしている場合は、それらのサーバーで少なくとも Oracle VM Server for SPARC 3.5 ソフトウェアを実行することをお勧めします。これが不可能な場合は、`ldmd/migration_adi_legacy_compat` SMF プロパティを使用するときに細心の注意を払います。このプロパティの不適切な使用によって、移行対象のドメインで ADI が使用されている場合に、アプリケーションの未定義な動作が発生する可能性があります。

デフォルトで、プロパティ値は `false` であり、これにより、ソースマシンとターゲットマシンの両方が SSM をサポートしていて、Oracle VM Server for SPARC ソフトウェアの必要なバージョンを実行していないかぎり、ドメインの移行が妨げられます。このプロパティは SSM をサポートしないサーバーには影響を与えません。

値が `true` の場合、ドメイン移行は、ADI バージョン情報の移行をサポートせずに続行されます。

そのため、ソースマシンまたはターゲットマシンのいずれかで、ADI バージョン情報の移行をサポートしない 3.5 より古い Oracle VM Server for SPARC ソフトウェアのバージョンを実行している場合は、移行が許可されます。

次の両方の状況が当てはまる場合にのみ、`ldmd/migration_adi_legacy_compat` SMF プロパティ値を `true` に設定してください。

- ソースマシンとターゲットマシンの両方を、ADI バージョン情報の移行をサポートしている Oracle VM Server for SPARC ソフトウェアのバージョンにアップグレードできない
- 移行対象のドメイン内で ADI バージョン管理が使用されていないことが確実にわかっている

このプロパティを `true` に設定すると、ADI バージョン情報がターゲットマシンに転送されない移行が許可されます。この状況により、移行対象のドメインで ADI が使用されている場合に、アプリケーションの未定義の動作が発生することがあります。

`ldmd/migration_adi_legacy_compat` SMF プロパティは、3.5 より古い Oracle VM Server for SPARC のバージョンでは認識されません。このプロパティの使用は、少なくとも Oracle VM Server for SPARC 3.5 が実行されているソースマシンまたはターゲットマシンにのみ適用されます。

ldm(1M): set-domain サブコマンドと -i オプションの説明が更新された

[ldm\(1M\)](#) マニュアルページには次の更新が含まれます。

- 最初の段落は次のようになります。

`set-domain` サブコマンドにより、ドメインの `boot-policy`、`mac-addr`、`hostid`、`failure-policy`、`extended-mapin-space`、`master`、`max-cores` などのプロパティを変更できます。このコマンドをリソースを更新するために使用することはできません。

- `-i` の説明は次のようになります。

`-i file` は、論理ドメインのプロパティの設定で使用する XML 構成ファイルを指定します。

XML ファイルで指定された `ldom_info` ノードのみが解析されません。 `vcpu`、`mau`、`memory` などのリソースノードは無視されます。

XML ファイル内で `hostid` プロパティがすでに使用されている場合、`ldm set-domain -i` コマンドが次のエラーで失敗します。

Hostid *host-ID* is already in use

ldm set-domain -i コマンドを再実行する前に、XML ファイルから hostid エントリを削除します。

ldm(1M) はコマンド履歴バッファを誤って参照している

ldm(1M) のマニュアルページは、ldm list-history コマンドを使用して表示できるコマンド履歴バッファを誤って参照しています。

コマンド履歴に関するセクションの第 1 および第 2 段落は、次の段落で更新されました。

ldm list-history コマンドを使用すると、Oracle VM Server for SPARC のコマンド履歴ログを表示できます。このログは、ldm コマンドと、XMPP インタフェース経由で発行されるコマンドをキャプチャーします。デフォルトで、ldm list-history コマンドによって示されるコマンドの数は 10 個です。

ldm list-history コマンドによって出力されるコマンドの数を変更するには、ldm set-logctl コマンドを使用して history プロパティ値を設定します。history=0 と設定すると、コマンド履歴の保存が無効になります。history プロパティをゼロ以外の値に設定すると、この機能を再度有効にできます。

ロギング操作の制御に関するセクション内の history プロパティの説明が、次のように更新されました。

history=num は、ldm list-history コマンドによって出力されるコマンド数を指定します。値を 0 に設定すると、コマンド履歴の保存が無効になります。

ロギング機能の表示に関するセクションの -a オプションの説明が、次のように更新されました。

-a は、すべてのロギングタイプのロギング機能の値と ldm list-history コマンドによって出力されるコマンド数を表示します。

解決済みの問題

Oracle VM Server for SPARC 3.5 ソフトウェアリリースでは、次の改善要求およびバグが修正されています。

15527921	明示的なコンソールグループ/ポートバインディングの移行
15639066	ldm stop ldg1 &; CTRL-C; ldm stop -f ldg1; により ldmd アサートが発生する
15697510	create_basic_vsw_node() のメモリーリーク
15719675	RFE: ldm 履歴サブコマンドの追加
15787709	静的 (ブート時) および動的メモリー割り当ての整列の統一
15789213	Logical Domains Manager からきわめて古い HV リビジョンのサポートを削除
15794303	SR-IOV Ethernet 仮想機能を含むドメインの移行
15797943	「ldm stop」 コマンドが待機する時間を指定する方法を提供
15809245	RFE: PCIe バス名で、別名の代わりに NAC 名を使用する必要がある
15811686	無効なパスワードについての移行エラーメッセージが正しくない
15814148	XML list-bindings コマンドに「拡張」出力オプションが必要である
15816196	続いて SP がリセットされると、移行済みのゲストドメインが再表示される
15821739	mdstore.c 内の XML v2 インタフェースの痕跡
16524266	XMPP インタフェースで list-io CLI コマンドを使用できるようにすべきである
16922190	ldc_mapin_base および ldc_mapin_size を出荷時のデフォルトの HV MD から直接伝播する
17401528	Logical Domains Manager XML インタフェースが物理的な割り当ての CPU 使用率を報告しない
17401564	重複した VDSDEV の作成を試みた場合に、XML インタフェースがエラーを報告しない

17812407	Logical Domains Manager が不要な rpath で構築する
18111544	2つのゲストドメインが同じ MAC アドレスと IP アドレスを持ち、機能している
18167985	MIB vnetTable に link prop、pvlan、maxbw などの一部の属性が欠落している
18320689	ldm から ldmd にコマンド引数を送信するコードに引数チェックがない
18375880	アフィニティーアルゴリズムが複数ノード構成で CPU を誤って割り当てる
18827424	XMPP インタフェースで list-netdev および list-netstat CLI コマンドを使用できるようにすべきである
19167766	database_ldom_add_net_client() およびその他の vnet 関数のパラメータが多すぎる
19917454	ldmd の libssl の使用の再考
19932503	物理 RC の HV MBLOCK が正しくリンクされていない
19934101	ライブ移行全体で、ADI タグが保持されるべきである
19944379	RA 制限を決定するための mem-#ra-bits プロパティのサポート
20085077	ldm start-reconf/cancel-reconf のループにより、ldmd が中止され、hv_mblock が使い果たされる
20662802	列挙された文字列およびブール型文字列を処理する共通の関数
20731165	1つの遅延グループのあるシステムでの「PRI ノードインターリーブ値がありません」警告
20766195	名前付きコアリソースを使用したドメインの移行
20828870	ldmd ロギングには大幅な改善が必要である
21201719	ldom-mgr: EOL の alloca の使用
21274667	ルートドメインが停止した場合に、I/O ドメインを起動するための -f オプションが ldm start に追加

21354984	移行が「補助接続障害」エラーで失敗する
21445956	遅延再構成メッセージが、コアと CPU 操作間で一貫性がない
21563292	移行で、プラットフォーム LPS ではなく実効 LPS を使用するべきである
21780022	Oracle VM Server for SPARC 3.3 でライブ移行が失敗するときがある
21895478	Oracle VM Server for SPARC MIB IOBusTable は新規/追加情報を含めるように更新する必要がある
22175515	XMPP インタフェースで <code>ldm list-domain -e</code> を使用できるようにするべきである
22197942	OBP 変数の変更が <code>eeprom</code> コマンドで常に正しく反映されない
22204673	<code>ls-bindings</code> (<code>vsw</code> およびネットワーク) で <code>prtvec</code> ユーティリティー機能を使用して、ポインタの一時リストの管理の実装を簡素化できる
22377138	<code>ldm ls-spconfig</code> はオプションの固有の構成引数を取るべきである
22529020	18746688 の自動保存最適化の修正/有効化
22556221	CPU DR エラー処理は、 <code>mmu_info_assign(): mmu == cmmu</code> でアサートできる
22577014	CMI ドメインを復旧モードで正しく回復できない
22597094	<code>ldomVswInterVnetLink</code> は <code>on/auto</code> と <code>off/auto</code> を区別するべきである
22956865	<code>libadimalloc</code> とリンクされた <code>ldmd</code> が <code>add-vcpu</code> コマンドでコアダンプする
23025823	ルートドメイン上の複数の RC による <code>addboard</code> で I/O デバイスの復元が失敗する
23026660	HVFRAG_TYPE_RKEY_TABLE のサポートの削除
23048855	<code>no_mem_cmp()</code> のチェックでアフィニティーの計算が誤っている
23074031	Oracle VM Server for SPARC 3.1 から 3.3 <code>vdisk</code> のアップグレード後に、 <code>vdsdev</code> および自動保存構成が失われる

23108061	バインド失敗後のバインドで、ldmd がコアダンプする
23119242	2000 個の vnet の追加後にゲストが 999 個の vnet しか表示しない
23144895	MIB ldomSPConfigTable が工場出荷時のデフォルトを除くすべての sp-config を一覧表示しない
23154856	ADI malloc が有効にされている復旧モード中に Logical Domains Manager がクラッシュする
23254423	同じ CPU ファミリ内のネイティブ移行のサポート
23260980	Logical Domains Manager ptrvec の改善
23282766	XML インタフェースおよび MIB は縮退構成に対して [degraded] タグを表示するべきである
23284476	mig_hwcaps.c から「SPARC-SN」の両方のインスタンスを削除
23292662	STR_MATCH マクロに加えられた変更によって PAPSAT のメインメニューが破損
23488114	p2v: 警告: pragma redefine_extname によって再定義される名前は static: リンクで宣言される
23571820	名前付きコアリソースの動的再構成 (追加および削除)
23572679	ブラックリスト登録済みリソースを一覧表示するコマンドまたは APIが必要
23587909	SRIOV Ethernet ライブ移行をサポートするための ldm I/O CLI コマンドの更新
23587949	Logical Domains Manager の反射型リレーのサポート
23587961	Logical Domains Manager の動的 alt-mac-address のサポート
23698097	ldm ls-constraints でバインドされていないドメインの構成済み mpgroup 機能が失われる
23700874	プライマリでの set-vcpu 試行の失敗により、コア全体の制約が削除される
23725678	システムドメインのサポートの削除
23732652	physical-bindings=core が完全に削除されない

23751486	行の障害のあとの complete_pending_evac_memory で ldmd がコア ダンプする
23756620	Fujitsu SPARC M12 サーバーのライブ移行のサポート
23756677	Fujitsu SPARC M12 サーバーの PPAR DR およびラージページのサ ポート
23756776	Fujitsu SPARC M12 サーバークラスタ Demap のサポート
23757096	init-system による CMI ドメインの回復に失敗する
23761597	ldmd が --disable-migration-comp オプションでクラッシュする
23762236	ブラックリストリタイア操作は自動保存を更新するべきではない
23763000	CMI 対応 Fujitsu SPARC M12 サーバー 2 ソケットシステムでのア サーションの失敗
24310184	stop -f 実行時に、ldmd アサートが mem_unconfigure_blacklisted_range() でヒットする
24341689	ldmd が --migration-pagesize 8192 でクラッシュする
24343698	名前付きメモリーリソースの動的再構成 (追加および削除)
24354353	「ldm rm-sconfig」で最後に作成された構成の自動保存を削除で きない
24428051	ldm ls-io -p -l のデータフィールドでの一覧表示エラー
24788913	developer/opensolaris/ldoms は間もなく削除される gcc バージョン と依存関係がある
24469054	メモリー使用率が自己リフレッシュ電源状態を下回ると、Fujitsu M10 PM が要求しない
24513690	list-io の解析不可能な出力で、間違っただけの列にバスとドメインがあ る
24517671	Oracle Solaris で ldmd はデフォルトで OpenSSL PKCS #11 エンジン を使用するべきではない
24579103	仮想機能の ldm set-io 使用法メッセージで、ユーザー割り当て名 オプションを表示するべきでない

24604492	ldm add/rm-io <BUS の NAC 名> が機能しない
24608425	実効ページサイズの計算ミスにより、Fujitsu M10 で予期しない移行の失敗が発生する
24615854	ファイバチャネル仮想機能にユーザー名を割り当てる ldm set-io が誤ったエラーを報告する
24468983	unbind=shutdown の deleteboard で整合性のない構成が発生する
24671677	システムコントローラからブートセットを回復しようとするとき ldmd がコアダンプする
24682710	ブラックリストリタイア操作後の縮退構成の警告メッセージのクリーンアップ
24717093	SP のフェイルオーバー後に ldm ls-spconfig が失敗する
24718083	SNMP の切断後、snmp 経由の PM ポリシーで割当量を戻すことができない
24810649	コマンドロギングに XML から開始されたコマンドを含める必要がある
24819893	ソケットコマンドにより、別の構成から保存されたデータベースでコアダンプが発生する
24819898	ldmd が Board DR addboard によってソケット制約が設定されたシステムでコアダンプする
24819902	比率モードの deleteboard でドメインから追加の vcpu が削除されることがある
24819912	名前付きリソースの動的再構成が、遅延再構成でコアダンプすることがある
24826440	ovmtdeploy がエラー「デバイスの展開の失敗」で失敗する
24849679	ADI を使用したドメインの移行には Logical Domains Manager のサポートが必要
24919193	libds_chan_create_rsp() でのマイナーメモリーリーク
24947310	ldmd がライブ移行中にコアダンプする
24965576	ldoms-constraints に仮想機能のユーザー割り当て名がない

25034173	非デバッグビットで SMF 経由で電源管理を無効にするメカニズムを提供
25037061	ldmd が umem_do_abort でコアダンプする
25070368	反射型リレーがアグリゲーションに従わない
25084643	名前付きリソースの移行用に CLI/XML インタフェースを導入
25084669	名前付きメモリーリソースを使用したドメインの移行
25084688	バインドされているゲストの移行中に Logical Domains Manager がクラッシュする
25140841	メモリー UE の挿入後の ldm ls-devices -B によって、ldm コマンドがハングアップする
25165458	I/O ドメイン仮想機能が、プライマリドメインのリブート後に再開に失敗し、ポリシーが無視する
25189906	スパーファイルをより適切にサポートするように diskio を更新
25240380	ADI 関連の移行エラーのエラー報告を改善
25240482	複数のパスワードファイルを「migrate」コマンドに渡すことができる
25290866	ldm migrate はネットワーク io のタイムアウトについてより適切なエラーメッセージを記録するべきである
25316565	mig_src_warm_init() からのメモリーリーク
25340760	名前付きメモリーリソースを使用したドメインの移行が部分マッピングを行う
25341049	VTS コンポーネントストレスメモリーテストおよび電源テスト中に Oracle Solaris でパニックが発生する
25347257	Logical Domains Manager は vnet/vsw で 1500 未満の MTU をサポートするべきである
25378217	ldm set-vsw vid=xxx は負の値を受け入れる (ただし、VID は変更されない)
25381139	一部の SR-IOV コマンドで文字列「name」があいまいに使用されている

25388410	関数プロトタイプ <code>dr_mem.h:dr_mem_qry_f</code> が <code>dr_mem.c:dr_mem_query</code> に一致しない
25390105	回避された仮想機能が存在する場合に、 <code>ls-constraint</code> が実行されると <code>ldmd</code> がコアダンプする
25394230	一部の PPAR DR デバッグメッセージを情報メッセージに変更
25394451	衝突すべきでない場合のすべての MAC アドレスの MAC 衝突チェック
25416007	Logical Domains Manager ロギングのマイナー修正
25420434	<code>ldm init-system</code> が <code>(-f)</code> フラグを使用して作成された <code>vdsdevs</code> を再作成しない
25422195	<code>ldm</code> は <code>mode=[sc]</code> が LM 全体で整合性があるかどうかを確認すべきである
25429988	<code>ldm</code> は <code>vnet</code> の <code>vid != vsw</code> の <code>dvid</code> であることを確認すべきである
25438641	<code>ldmd --logctl</code> コマンド行の解析の問題
25496410	<code>ls-constraints -x</code> 出力の <code>boot-policy n/a</code> は正しくない
25498880	3.4 から 3.5 へのドメインの移行が ADI 対応プラットフォームで失敗する
25511830	PPAR DR によって発生した PRI 更新後のドメインのリポート時に <code>ldmd</code> がコアダンプする
25511942	<code>recreate_named_cids</code> がメモリーを解放しない
25512076	IOV <code>pciedev</code> コードにメモリーの解放の問題がある
25535305	メモリー一致呼び出しのターゲットチェックにドメインポインタが欠落している
25559758	ILOM 相互接続の復元でブラックリストを送信する Logical Domains Manager が再生される
25560010	Fujitsu M10 サーバーに必要な <code>dr_cpu_remap</code> のサポート
25577939	移行が進行中の場合、OpenBoot PROM 変数の更新がブロックされるべきである

25585009	ldm set-vsw -q が正しく機能しない - メッセージなし、ゼロ以外の終了値
25600483	移行での xml_v3_named_map からのメモリーリーク
25600818	移行での mig_tgt_warm_recv_state() からのメモリーリーク
25606866	「ldm set-vsw vid=xxx」のメモリーリーク
25631877	移行ドライラン中の iov_mig_tgt_add_vfs() でのセグメント例外
25690054	migrate_domain_create() にドメイン MAC 衝突チェックがない
25690079	cli_conn_t の初期化は整合性がなく、エラーが発生しやすく、危険である
25712656	論理ドメイン変数の更新で、varconfig-update が使用できない場合にエラーを出力するべきである
25721740	DR CPU PRE コマンドと POST コマンド間での ldmd の中止により、コアの再マップが失敗することがある
25721810	deleteboard シーケンス中に ldmd が大量のメモリーを消費する
25743217	欠落している「hwcap-list」MD プロパティをサポートする必要がある
25766479	Oracle VM Server for SPARC 3.5_b22 CLI: 「ldm add-vsw」で「Usage」を表示しない
25772308	ILOM への接続が停止している場合のエラーメッセージで OS 固有のソリューションが示唆される
25774540	名前付きリソースの移行で、無効な mblockmap が許可される
25789968	getopt_long () への呼び出しは optind = 0 に依存できない
25790237	プライマリドメイン鍵が、spconfig の更新後に正しく保持されない
25802105	SPARC64_CLASS1 移行グループの sparc64-cpu モジュール
25852557	i_tgt_chk_ra_pa_congruence() で名前付きリソースの移行がクラッシュする
25861447	testDynAltMacUpd が alt-mac-address の更新中に失敗する

25861735	ldm stop -t sec でのマイナー入力検証エラー
25861951	ルートドメインがファイバチャネル SR-IOV をサポートするように遷移したら、ldmd は物理機能情報を更新するべきである
25871519	ドメインが遅延再構成中に、実効ページサイズが 2 回計算される
25891463	移行コマンドの「force」オプションがターゲットに伝播されない
25926495	ブラックリスト退避後の縮退構成メッセージのクリーンアップ
25954547	バックエンドがリンクアグリゲーションである場合に ldm init-system が vsw の復元に失敗する
25976734	システムに多数の I/O デバイスがある場合に、deleteboard が失敗することがある
25976819	CPU 自動置換は、drd の準備ができていない場合でも障害のあるストランドを再マップする
25976856	クラッシュの回復中に、PRE のキャンセルが不適切に発行されることがある
25987495	3.4 スタックから 3.5 スタックへのネイティブ移行に対する情報メッセージが必要である
26001877	iov_seq_work() のメモリーリーク
26004742	LDoms Power Mgmt Observability RBAC プロファイルのあるユーザーに対して ldmpower が失敗する
26021889	ovmtlibrary が PSARC/2017/103 によってリタイアされている /usr/sfw/bin/wget を使用する
26035583	ds_netsvc が send_data_request_to_agent() を呼び出す場合のメモリー解放問題による ldmd のコア
26052693	誤った mem-latency-grp のため、PPAR DR deleteboard 後に OS パニックが発生する
26086941	cpu_del() は CPU_DR_OP_FAILED を処理し、false を返すべきである
26138962	移行仮想機能の削除とダーティーページトラッキングが適切に組み合わされていない

-
- | | |
|----------|--|
| 26166680 | MALLOC_CHECK_=2 が xml_call_cli_cmd/xml_v3_list_hba での無効なポインタの解放を報告する |
| 26169909 | メモリーの再マップが失敗した場合に、unbind=shutdown を指定した deleteboard がコアダンプすることがある |
| 26176351 | pm-rm 登録が遅延した場合に、CPU チップが電源管理されない |
| 26235395 | ldmd が保守状態になる: MD の解析中に LDC チャネルの割り当てに失敗する |
| 26315289 | ldmd が保守状態になる: MD の解析中に LDC チャネルの割り当てに失敗する |
| 26325102 | プライマリでの no_reset_flag を設定する不正な試みによって、Oracle VM Server for SPARC がコアダンプする |

